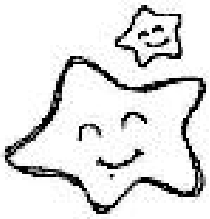
QSK(にぬふぁぶし) 1997 年 9 月 18 日 第三種郵便物承認　通巻 7922 号 2022 年 11 月 23 日 発行　(1)
（毎月 1.2.3.4.5.6.7 がつく日）

QSK にぬふぁぶし

No.309

子(ね)の方向の星（北極星）



読谷村(よみたんそん)家族会『夜明け前のうた』自主上映のご報告

９月 24 日土曜日、読谷村文化センター中ホールにて、読谷村精神療養者家族会の主催で、映画『夜明け前のうた～消された沖縄の障害者』自主上映会を開催しました。

映画上映を前に私が思い出したのは、當山幸子会長の「ぜひ読谷村でもこの映画を上映したい」という言葉でした。コロナ禍で様々な行事が開催の難しいなかでしたが、諦めることなく準備を進めてきました。初めての事で映画の上映準備についてどこから手を付けていいか分からない状態でしたが、沖福連・山田圭吾会長をはじめたくさんの方々に協力していただき、無事に開催することができました。

より多くの方々に映画を見ていただきたいとの當山会長の意向もあり、入場無料となりました。その思いが届いたのか、多くの方々が会場に足を運んでくださり、その数は 120 名に上りました。会場に準備していた座席はあっという間に埋まり、私は司会の仕事を忘れて追加の座席の準備に追われることになりました。

映画上映後には原義和監督にご登壇いただき、制作にまつわる貴重なお話を拝聴することができました。様々な理由で監置小屋に入ることになってしまった方々。その行動にも彼らなりの理由や苦しみがあったはずです。私宅監置という制度で、果たして彼らの本当の声を聞くことができたのでしょうか。私がもし監置小屋に入ることになったら。考えるだけでも恐ろしく、全てのものが崩れ落ちていくような感覚に陥ったことでしょう。

今回の上映会に足を運んでいただいた方々が映画を鑑賞することで様々なものを感じ、精神疾患について関心を抱くきっかけになっていただければと思っております。

読谷村精神療養者家族会　松田 俊

映画『夜明け前のうた』を観て

映画の上映会が読谷村文化センターでありました。今回、読谷村精神療養者家族会のみなさんが揃いの服をつけて受付を手伝っていました。当事者の私はそれを見て、家族のみなさま、それぞれがそれぞれのところで力を入れて頑張っているなァーと感じました。精神障がいに関わると、本人の苦しみと家族の辛さ、どちらも大変だと感じます。

上映は定刻より少し遅れてのスタートでしたが、今回はじめて作品を観て、感動を覚えました。映画が終わった後、壇上へ上がった監督の原さんから作品についてのスピーチがあり、2020 年にできた映画ということをお話ししていました。

監置されている兄弟の場面が特に印象深かったため、その場面についてもお話ししたいと思います。その監置所の前のほうで母親が写真に収まっていましたが、母親はどんな心持ちで写されたのか、心情を思いました。

現在でいう入院生活者は、入院すればきっとよくなる、よくなってから普段の生活に戻れるんだという気持ちがあると思いますが、その兄弟は治療を受けることもなく、何日も何年も、小さな檻に閉じ込められていました。彼らのように閉じ込められた人のなかには、食事を毎日三度三度運び入れられる人もいれば、三日に一度しかもらえない人もいるということでした。

私宅監置は、封印されてきた医療方針であり、隠され続けようとした制度です。日本では廃止された後も、なお沖縄では存続されたということに着目するとしたら、沖縄は大変な迷惑を担い続けてきました。

映画を観ていて気がついたことがありました。それは、撮影している原さんの影が映っているのです。映画を作る私（原）もまた映画のなかにいる、私も関係者である、とのアピールを、観る人に訴えているように感じました。

精神障がいは治らない、よくなることはないと思うことがあったとしても、自分に与えられた作業をすることができます。

映画のなかでの回想、ヤギの草刈りをして、ふらふらと歩きながら草を背負い帰っていったという人のお話が心に残っています。

人がそれぞれに自分の役割を持つことの大切さを教えられました。

石川 勝則（当事者）

演劇参加＝ケミストリー

2022 年 10 月 5 日水曜日 18 時、突然の化学変化が始まった。

場所は那覇市にある「ぶんかテンブス館・テンブスホール」。会場名にもちょっぴり怪しい響きがある。知らない人からすると、少し近寄りがたくもあるかも知れない。

その日は朝からどんよりして小雨が降り続いていた。仕事を終えたあと、会場に向かうために停留所でバスが来るのを待っていた。天候のせいで時間どおりに来ないバスに少しイライラしている自分がいた。辺りを見渡すと帰宅時間ということもあり、せわしなく人々が行き交っている。

ようやくやってきたバスに飛び乗り、座席に座った。一息ついて窓の外を見たとたん、雨脚がいっそう強さを増した。まるでこれから起ころうとしている物語を予感しているかのように。

8 月、てるしのワークセンター職員の比嘉さん、知念さんの声かけにより、3 か月間の歌の特訓が始まった。最初 5 名だったメンバーは、イタリア語の歌をうたうというハードルにもかかわらず、日を追うごとに 1 人また 1 人と増えていった。

またそれとは逆に、公演の日取りが近づくにつれ、不安になるメンバーも出はじめた。何度も何度も当日のことをメンバーや家族にも知らせ、イメージ作りに努めてはいたが、みんなの不安を取り除くには足りなかった。

日々の練習は、本番に向けて、恐怖のカウントダウンへと変化していった。

「やっぱり公演には出ない……」恐れていたことが始まった。レッスンを通して高まっていく自信とは裏腹に、得体の知れない不安や心地悪さとも戦っていたのだろう。ある程度予想していたことではあったが、実際に起こってしまうと自分たちも動揺を隠すことができなかった。その恐怖がメンバーに広がらないかを気にしながら、祈るように声かけを忘れなかった。

演目は【marat sade】マラー/サド。2022 年世界精神保健デー普及啓発活動と位置づけられ、世界各地の精神科病院と表現活動とをつなげるプロジェクトとして行なわれている。日本の精神障がい当事者と医療福祉従事者による、映像と生の演技とをコラボレーションした舞台だ。クライマックスで心の葛藤を叫ぶイタリア語の歌を、てるしのワークセンターのメンバーらも一緒に受け持つことになった。

次のページに続く

前のページから

舞台上の演者が、長い木刀を振るう鈍い音が３回、「ドン・ドン・ドン」……。

いよいよ始まった。障がいや社会からの解放、それらに向かう革命と自由を、現代社会に問う作品である。人間の苦悩、悲しみ、優しさ、希望、自由、そして革命を歌う歌曲が登場する。そのなかの［matti si, ma schiavi no］、「奴隷でいるのはもう終わりだ！」心のなかの葛藤を表現した歌を奏でるため、みんなで出番を待っていた。

私はてるしのメンバーと通路を挟んだすぐ後ろの席で観覧していた。舞台を見ながらメンバーの日常を思い出していた。事業所ではいつもまるで落ち着きのないメンバーが、席で微動だにせず舞台に集中している。この時点で、彼らも一緒になって舞台を作り出している感じが伝わってきた。

出番の時間がやってくる。椅子をゆっくりと引き、立ち上がるメンバーがそこにいた。2、3 日前までの弱々しい、自信のない彼ら彼女らの姿はそこにはなかった。力強いハーモニーが流れ、時が過ぎていった。同時に私の心も満たされ、いつしか目頭が熱くなった。

舞台が終了し、ホールの片隅にてるしのメンバーが集結した。

「遅い時間までお疲れ様です」あえて事務的に締めくくる私がいた。集合場所で聞こえてきたメンバーの会話は「楽しかった、もう一度やりたい」など前向きで、否定的な表現は一切なかった。そのような場面で演劇の感想を求められたら感極まり、言葉ではなく涙しか出なくなると、その時とっさに感じていた。

メンバーや引率の職員に別れを告げ、足早にホールの出入り口に向かった。いまだ降りやまぬ雨のなか、バスに揺られて帰路へついた。車中、いろいろなことが頭をよぎっていった。

新しい風を運んできてくれた比嘉さん、知念さん、その風に乗ってくれた、てるしのメンバーのみなさん、日々の練習が報われましたね。とても感動的な公演でした。新しいことにチャレンジした勇気にエールを送ります。

てるしのワークセンター施設長　岸本吉博

「物事を成し遂げる秘訣は、行動することだ」
（イタリアの詩人・ダンテの言葉）

「心のバリアフリー作品展』
今年は、無事全日程開催することができました！！

沖縄市では、8 月 1 日～9 月 7 日を平和月間と定められており、支援センターおきなわではその平和月間の賛同企画として、障がいの有無や老若男女に関わらず、

“心のバリアフリー”という視点から、日常の生活の中で感じる平和を考えていくことを目的として、『心のバリアフリー作品展』を実施させていただいております。

昨年は、コロナ感染拡大防止の為、会場使用が叶わなかった経緯もあり、1か所での展示を開催のみでしたが、今年は予定の全日程、展示することができました。

参加団体

新垣病院デイケア
沖縄中央病院デイケア
沖縄リハビリテーションセンター病院デイケア
地域活動支援センターよつば

沖縄市立図書館
沖縄市役所市民ギャラリー
沖縄市福祉文化プラザロビー

展示場所

・ひとつひとつの作品から優しさが感じられました。ありがとう。私の心も優しさでいっぱいになりました。（72 歳女性）
・どの作品も心がこもっていて見るだけで温かい気持ちになりました。たくさん時間をかけて仕上げた作品に、ただただ感動しました。（40 歳女性）
・子どもと一緒に観ました。楽しい作品をありがとうございます。（35 歳女性）
・すべてとてもじょうずでした。わたしも作ってみようかなと思います！！（9 歳女性）

本の紹介コーナー

“体制が引き起こす普遍的事件のひとつ”

精神病院の保護室における自殺により息子を失った作者が、精神医療に対して抱いたさまざまな疑問や違和感を書きつけたルポルタージュ。

作者自身は耳鼻科の医師ということで、医療の専門家としての視点も持っている。根気強く調べた事実が分析的に並べられている。同時に、息子をそばで見てきた父親としての眼差しもある。裁判の顛末なども含まれたシビアで深刻な内容であるにも関わらず、読みやすくページを繰る手が止まらなくなるのは、この父親としての情緒が全編で底に流れているためと感じた。（増山）

『心なき精神医療を父が裁く』
竹内實著（現代書館）

作者の竹内さんも登場するオンラインイベント『精神病院訴訟の裁判官を裁く！』が、「日本の Matto の町を考える会」の主催で、11 月 13 日（日）に予定されています。

■ 事前申込締切：11 月 10 日

■ 参加費：1,500 円

詳しくは、右のＱＲコードより。

イベント詳細は↑より
ご確認ください

◎編　集　後　記◎

夕方帰宅時間に窓の外を見ると、既に暗くなっている。
以前より確実に日暮れもはやくなり、季節も夏から秋に変わろうとしている。
2022 年も残す所あと二カ月、毎度の事ながら今年の自分は何をしてた？と反省。（お）

編集：公益社団法人
沖縄県精神保健福祉会連合会
会長　山田　圭吾
〒901-1104
沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206－1
てるしのワークセンター内
電話 098-889-4011　FAX098-888-5655
E-mail　terushino@castle.ocn.ne.jp
発行：九州障害者定期刊行物協会
〒812-0068
福岡市東区社領１丁目 12 番４号
電話 092-753-9722　FAX092-753-9723
定価：１０円（会費に含まれる）